

キリスト教の現地化

ある宗教が全く異なる文化に長い年月をかけて根を下ろし、その土地の文化を吸収して独自の成長を遂げることを「土着化」と呼ぶ。ほぼ同じ意味を持つものに「インカルチュレーション」という言葉があるが、これは神学や宗教学の分野でキリスト教の土着化という意味で用いられることが多いようだ。一方、「現地化」という言葉は、宗教にとどまらず移民や企業などの社会集団が現地の文化に適応することを指す。「現地化」は、「土着化」や「インカルチュレーション」と比べると、射程の長い概念であり、宗教の異文化への適応を様々な側面で言い当てるのに適している。

同じキリスト教でも、カトリックとプロテスタントでは異文化伝道における方針と戦略には大きな隔たりがあった。礼拝や祈祷など儀礼体系を持ち込むことに重きを置いたカトリックは、儀礼の形式が破られない限り現地文化に対しては比較的寛容であったのに対し、神の御言葉を伝え、その正しい解釈を教えることが最も重要な課題であったプロテスタントは、現地文化に対しては厳しく接した。現地文化への対応を含めた宣教戦略の違いは、確かに各宗派の現地化の過程に影響を及ぼした。だが、どの宗派であれキリスト教の現地化を考える際に、次の二つの領域に分けて考えてみるのが良いだろう。

一つは、言語や制度・組織の現地化である。これは、明確な宣教方針に基づき目的をもって進められる現地化であり、その過程で困難は伴うものの、宣教する側はその困難を同定して対応することが可能である。もう一つは、儀礼を含む教会活動や教義、さらには信仰そのものにおける現地化である。この領域の現地化は、現地文化の影響をより重大に受けながら進行するため、その過程で発生する問題をたとえ認識することもコントロールすることは難しい。“土着化”として扱われる問題の多くは、後者の領域における現地化であり、しばしば「シンクレティズム」という言葉で言い表される。

ハワイ化されるキリスト教

1820年にハワイで宣教活動を開始した会衆派教会は、極めて早い段階で、聖書や賛美歌のハワイ語訳、ハワイ語による礼拝式など、言語面での現地化を完了させた。19世紀中盤には米国の伝道評議会から独立して組織面での現地化が進み、同世紀後半は各地の教会でハワイ人牧師の登用が徐々に進んでいった。また、19世紀末から20世紀前半にかけて、聖歌の合唱や聖書の暗唱といった日曜学校の成果を各会衆が発表し合うホーイケと呼ばれる集会在行われた。娯楽要素の強い、ともすれば会衆間の熱の入った競い合いになるこの集会は、白人牧師の報告書などを読むと、ハワイ人信徒の教育のために現地の文化を教会に取り込んだ活動のように見受けられる。

教義面での現地化は、現地の人々が主体的に教義の解釈を行うようになることであり、それは我がものとしてのキリスト教信仰の確立にとって欠くことのできない条件である。ところで、ハワイの会衆派教会の歴史において教義や信仰の現地化を考えると、19世紀後半と現在とでは面白い対比が見えてくる。例えば、萌芽的な千年王国運動を起こしたカオナや独立教会を設立したケキピの唱える教えは、当時の白人牧師からは伝統宗教とキリスト教が融合した呪物崇拝もしくは呪術的性格を持った

異端と見なされた。しかし、彼らは意識的に土着の宗教概念を取り込んだり、アンチテーゼとしてのハワイ人独自のキリスト教を打ち立てようとしたわけではない。彼らの求めたものはあくまでも正統的なキリスト教であったが、皮肉なことに彼らが真のキリスト教徒になろうとすればするほど、ハワイ的な要素が前面に出てきたのであった。

翻って現在のキリスト教各宗派のハワイ化を眺めてみると、意識的なハワイ文化の流用が顕著であることが分かる。教会の聖壇の両脇にはハワイの王族の象徴であるカーヒリ（羽根ばたきの形状をした王旗）が据えられ、清めの儀式にはティー・リーフの葉と水と塩が用いられたり、正餐式にポイ（タロ芋のペースト）とニウ（椰子ジュース）が用いられたりする。また、新約聖書をハワイ人の歴史に基づいて書き直そうとする試みなどもなされる。「ハワイらしさ」という表象レベルでの問題が作用し、極めて意識的、操作的にキリスト教のハワイ化が進められるのである。19世紀後半に正統なキリスト教信仰を求めた結果、図らずもハワイ的な要素が強まっていったハワイ化とは異なる力学が、そこには働いている。

キリスト教化とハワイ化

外来のキリスト教と現地の文化が会うことで生まれる新たな文化が、キリスト教化した現地文化であると同時に、現地化したキリスト教文化でもあると指摘されることは多い。確かに、19世紀後半のカオナのシンクレティックな教義やケキピの信仰治療を重視した活動にそのような側面を見いだすことができるだろう。しかし、このキリスト教化と現地化が表裏一体であるという指摘はやや緻密さにかける。なぜなら、ここでのキリスト教化はキリスト教受容とほぼ同義であるため、この指摘は、キリスト教は受容される過程で現地化されるという凡庸なものに終わる可能性があるからだ。

むしろ、個々の文化要素の構造的な変化やそれらが用いられる文脈の変化に注目して、キリスト教化と現地化の関係について考えた方が面白いかもしれない。例えば、カルビン主義的価値観により“節度”ある振り付けに改変されたクリスチャン・フラは「キリスト教化」されたハワイ文化の典型的な例であるが、このフラを教会内で賛美歌に合わせて踊る行為は「ハワイ化」されたキリスト教儀式と捉えることができる。このように考えると、キリスト教化と現地化の関係は単純な表裏一体ではないことが分かる。

ハワイの場合、キリスト教と現地文化の出会いから生まれた新たな文化は、現地化されながらも制度として目に見える形で残ったキリスト教という枠組みで捉えられる。キリスト教化された現地の文化要素は、キリスト教のシステムの中に取り込まれるが、それを取り込んだがためにキリスト教のシステム全体は現地文化の性格を帯びようになる。長い時間をかけて徐々にキリスト教化されていったホオポノポノであれ、文化復興運動の興隆の中で発明されたクリスチャン・フラであれ、キリスト教のシステムに取り込まれることで逆にシステム全体をハワイ化していくのである。このようにキリスト教化と現地化の関係性に注意を払うと、キリスト教の現地化についてより詳細に考察することができる。